

## 青年期における対人感情と他者概念との関連

青木 みのり (お茶の水女子大学人間文化研究科)

The relation between feelings and concept toward others during the adolescence

Minori AOKI (*Ochanomizu University*)

In the present study, we examined whether or not positive and negative feelings towards others would have influence upon person perception. Subjects were 150 undergraduate students (48 male and 102 female). They were administered seven point scale questionnaires (self-differential [SD] scales composed of 20 pairs of adjectives) to measure concepts of real self, ideal self, favored others, and unfavored others. The results were as follows: (1) The subjects perceived that the unfavored others were more different from their own real self-concepts than what the others actually were. (2) The subjects perceived that the favored others were more similar to their own real self-concepts than what the others actually were. (3) The subjects perceived that the favored others were more similar to their own ideal self-concepts than to their own real self-concepts.

Key words: self-concept, adolescence, person perception, feelings, gender difference

キーワード: 自己概念、青年期、対人認知、感情、性差

### 問 題

人が他者を好きになることや嫌いになることが人格や態度からどのように予測されるかについては、主に対人魅力研究において論じられてきた。Byrne & Nelson (1965) は、態度の類似した他者が非類似の他者よりも好かれることを見出している。彼らはその理由として、態度の類似した他者の存在が自己の態度の正しさに対する保証となることをあげている。これに対して Winch (1958) は、要求がお互いに相補的である相手に対して好意を持ちやすいことを指摘している。その他、他者から好意的な評価を受けることにより、その他者に好意を抱くことも見出されている (Berscheid & Walster, 1969)。

これに対し、ある個人の好きな他者、嫌いな他者の認知が、その個人の自己概念とどのように関連しているかに関する研究も多い。Fiedler, Warrington, & Blaisdel (1952) は、人が自分が好意を抱く他者の性格特性を実際以上に自己に似せて認知する、いわゆる「仮定された類似性」(assumed similarity=AS)を見出し、この傾向をAS傾向と呼んだ。これに関連して、梶田 (1967) は、好悪という対人感情によって、その感情の対象となっている他者の概念がどのように異なってくるかについて、自己概念、理想自己の概念及び他者の実際の自己概念との関連性から検討をすすめた。その結果、好きな他者の概念と自己概念との関連は、主に好きな他者の概念と理想自己の概念との関係から説明できることから、AS傾向は好きな他者も自分自身も共に理想自己に類似して認知するという、いわゆる理想化傾向のため

に生ずるみせかけの傾向であるとした。

他者認知において、自己概念、特に理想自己の概念がその枠組みとして機能するということが梶田 (1967) において示唆された。さらに遠藤 (1993) は、正・負の理想自己が自己及び好きな他者・嫌いな他者の評価基準となり、特に自己にとって重要な属性が他者認知のさいにも重要視されることを見出している。

梶田 (1967) においては、理想自己の形成が始まる青年期前期にあたる中学生の男子のみに対して調査がおこなわれている。そこで本研究では、外的強化の作用が薄れ、理想自己が確立するとされる青年期後期 (東・小倉, 1982) においても同様に理想化傾向やAS傾向が見出されるかどうかに着目し、大学生と専門学校生を対象として研究を行うことを目的とした。それとともに、この時期には男女にかかる社会的圧力の差が大きくなると考えられていることから (東・小倉, 1982)、性差についても検討することとした。

また、分析にあたっては、現実の自己概念、理想の自己概念、好きな他者概念、苦手な他者概念、好きな他者の実際の自己概念、苦手な他者の実際の自己概念について調査し、それぞれの相関の値をもって概念間の類似の指標とした。ここで他者の実際の自己概念とは、好きな他者・苦手な他者として選択された相手が持っている実際の自己概念のことである。そして類似の大小については、AS傾向や理想化傾向から予想される仮説を不等式の形で表現し、検証することとした。

自己概念、他者概念の測定には、林 (1978) のSD(Self-Differential) 尺度を用いた。自己概念は他者との相互作用により成長し、また客観的に認知される自己の側面で

## 青木：青年期における対人感情と他者概念との関連

ある（福井，1990）ので、対人認知尺度によって測定することは妥当と考えられる。

以下に仮説について述べる。まずAS傾向から、好きな他者概念と現実の自己概念との類似は、好きな他者の実際の自己概念と現実の自己概念との類似よりも大きいと考えられる（仮説1）。また、苦手な他者については、梶田（1967）などから、これとは逆のことが予想されよう。即ち、苦手な他者概念と現実の自己概念との類似は、苦手な他者の実際の自己概念と現実の自己概念との類似よりも小さいと考えられる（仮説2）。

次に、理想自己と他者概念との関係について考えてみよう。梶田（1967）も指摘しているように理想自己と他者との関連は、現実自己と他者との関連を説明する大きな要因となっている。従って、理想の自己概念と好きな他者概念との類似は、現実の自己概念と好きな他者概念との類似よりも大きいと考えられる（仮説3）。苦手な他者については、理想自己との類似が小さいと考えられる（梶田，1967；遠藤，1993）ので、理想の自己概念と苦手な他者概念との類似は、現実の自己概念と苦手な他者概念との類似よりも小さいと考えられる（仮説4）。

これに対し、理想自己と他者の実際の自己概念との関連はどうであろうか。遠藤（1993）が指摘したように、理想自己を一つの基準として好きな他者が選択されているならば、理想の自己概念と好きな他者の実際の自己概念との類似は、現実の自己概念と好きな他者の実際の自己概念との類似よりも大きいと考えられる（仮説5）。これとは逆に、理想の自己概念と苦手な他者の実際の自己概念との類似は、現実の自己概念と苦手な他者の実際の自己概念との類似よりも小さいと考えられる（仮説6）。

以上の仮説を、Table 1 に示す。

## 方 法

## 被験者

心理学の授業を受けている都内の大学1校、専門学校2校の学生を対象とした。大学では心理学専攻の1クラス約50名（男女同数）の2クラスを対象に行った。専門学校Aは芸術系で、男女同数のクラスと男女比2対1のクラスの、それぞれ約50名の2クラスで行った。専門学校Bは保育系で、女子学生のみで1クラス約50名である。

このうち授業に出席し、質問紙を回収できたのは男子90名、女子198名であった。さらにこの中で、全ての項目に回答した有効回答は、男子48名、女子102名であった。

## 年齢と調査時期

平均年齢は男子18.5(±1)歳、女子18.5(±1)歳で、各学校の新生が対象である。調査時期は、ほぼクラス全員がお互いの名前を認識し、友人ができかけている、

新入生歓迎の行事（クラス合宿、クラスコンパ等）が1回行われた後の5月から6月にかけてである。

## 測定尺度

自己および他者を形容する際によく用いられる20の形容詞対からなる林（1978）の作成したSD尺度を用いた。各形容詞対はそれぞれ反対の意味をもつ2つの形容詞からなり、7件法によって評定される。

## 手続き

心理学の授業を受けているクラスの全員に対して本調査が行われた。本調査の結果が全て数字に直されて処理されることを確認した上で調査を行った。

現実の自己、理想の自己、クラスの中から選んだ同性の好きな他者、苦手な他者の4つについて、それぞれ質問紙に記入してもらった。好きな他者に関しては、「このクラスの同性の中から、あなたにとって好ましくて、これからも付き合いたいと思う人を、一人選んでください。」と教示し、苦手な他者については、「このクラスの同性の中から、あなたにとって好意を持たなくて、これからも付き合いたくないと思う人を、一人選んでください。」と教示した。また、好きな他者、苦手な他者の実名を記入させた。

質問紙の回答順は、回答に対する抵抗感をなるべく少なくするために、以下のようにした。(1) 現実の自己概念の評定、(2) 理想の自己概念の評定、(3) 特定の好きな他者をイメージした上で、その他者の概念の評定、(4) 好きな他者の実名の記入、(5) 特定の苦手な他者をイメージした上で、その他者の概念の評定、(6) 苦手な他者の実名の記入。

なお、共学である芸術系の専門学校Aと大学では、好きな他者・苦手な他者を選択される母集団は、男女とも20～30人前後であり、女子のみの保育系の専門学校Bでは、選択される母集団は50人であった。

以上6の質問項目全てに回答した者が有効回答者である。回答漏れの殆どは、(6)の苦手な他者の実名の記入であった。この(6)の記入漏れの被験者のデータは分析から省いた。なお、(6)の項目に回答していない者でも、その他の項目に回答し、他の調査対象者から(4)好きな他者か(6)苦手な他者として指名された場合、その対象者の(1)現実の自己概念の評定の項目は、指名した調査対象者のデータのために利用した。

## 分析方法

Table 1 に示した仮説を検証するため、それぞれの被験者について、現実の自己、理想の自己、好きな他者、苦手な他者についての回答、および好きな他者の現実の自己についての回答、苦手な他者の現実の自己についての回答、に関して相関と偏相関を算出した。そしてZ変換後、平均値を算出し、相関・偏相関の大きさに差があるか否かを検討するためにt検定を行った。これらの

方法は梶田(1967)によった。

### 結果と考察

#### 各概念間の相関と偏相関の値

Table 2 に相関の結果を、Table 3 に偏相関の結果を  
Table 1 仮説

好きな他者に関する仮説		苦手な他者に関する仮説	
仮説 1	SL > SLL	仮説 2	SD < SDD
仮説 3	IL > SL	仮説 4	ID < SD
仮説 5	ILL > SLL	仮説 6	IDD < SDD

注) SL: 現実の自己の概念(S)と好きな他者の概念(L)の相関  
SLL: 現実の自己の概念(S)と好きな他者の実際の自己概念(LL)の相関  
SD: 現実の自己の概念(S)と苦手な他者の概念(D)の相関  
SDD: 現実の自己の概念(S)と苦手な他者の実際の自己概念(DD)の相関  
IL: 理想の自己の概念(I)と好きな他者の概念(L)の相関  
ID: 理想の自己の概念(I)と苦手な他者の概念(D)の相関  
ILL: 理想の自己の概念(I)と好きな他者の実際の自己概念(LL)の相関  
IDD: 理想の自己の概念(I)と苦手な他者の実際の自己概念(DD)の相関

示す。まず男女ともに有意な相関がみられたものについて列挙していく。好きな他者概念と現実の自己概念に関して、男女ともに有意な正の相関が見られた。現実の自己概念と理想の自己概念の間にも正の相関が見られた。次に全体および女子に於いて、理想の自己概念と好きな他者の実際の自己概念の間、および苦手な他者の実際の自己概念との間には、正の相関がみられた。更に全体および女子においては、好きな他者概念と好きな他者の実際の自己概念との間に正の相関がみられた。男子のみにおいて、理想の自己概念と苦手な他者概念との間に負の相関の傾向がみられた。女子のみにおいて、現実の自己概念と、好きな他者の実際の自己概念との間に正の相関の傾向が見られた。以上相関パターンに関しては、梶田(1967)とはほぼ同様の結果となった。また、偏相関に関しては、男女ともに理想の自己概念と好きな他者概念の間に正の偏相関が見られた。このことは、好きな他者を理想自己に類似して感じる傾向が強いことを示す結果であり、梶田(1967)を支持する結果と言えよう。

以上の結果から概観すると、好きな他者概念は、現実の自己概念や理想の自己概念との間に相関がある。特に男子においては、実際の好きな他者や嫌いな他者の自己概念と理想の自己概念の間に相関がある。さらに女子は、好きな他者概念と好きな他者の実際の自己概念、および好きな他者の実際の自己概念と現実の自己概念との間に相関があるのに対して、男子にはこのような相関は見ら

Table 2 相関係数 (Pearson の積率相関係数)

	SL	SD	IL	ID	SLL	SDD	ILL	IDD	SI	LLL	DDD
全体	.311**	-.074	.646**	-.093	.192	.148	.299*	.254	.361**	.351**	.094
SD	.320	.321	.288	.407	.292	.291	.393	.356	.363	.325	.326
男	.289*	-.145	.598**	-.252†	.083	.042	.158	.158	.305*	.210	-.058
SD	.340	.299	.370	.406	.322	.295	.401	.395	.423	.307	.250
女	.321*	-.041	.669**	-.018	.244†	.198	.366**	.299*	.387**	.417**	.167
SD	.311	.327	.239	.388	.262	.276	.373	.329	.330	.313	.334

\*\*  $p < .01$  \*  $p < .05$  †  $p < .10$

注) LLL: 好きな他者の概念(L)と好きな他者の実際の自己概念(LL)の相関  
DDD: 苦手な他者の概念(D)と苦手な他者の実際の自己概念(DD)の相関

Table 3 偏相関係数

	SL	SD	IL	ID	SLL	SDD	ILL	IDD	SI	LLL	DDD
全体	.087	-.053	.496**	-.060	.063	.028	.044	.093	.180	.171	.089
SD	.286	.306	.307	.335	.297	.288	.331	.338	.343	.278	.310
男	.088	-.075	.422**	-.132	-.021	-.073	.053	.041	.200	.097	-.036
SD	.284	.279	.380	.345	.265	.263	.309	.339	.337	.246	.279
女	.087	-.042	.531**	-.027	.102	.075	.040	.118	.171	.207	.147
SD	.289	.318	.260	.327	.304	.288	.342	.337	.347	.286	.308

\*\*  $p < 0.1$  \*  $p < 0.5$  †  $p < 1.0$

## 青木：青年期における対人感情と他者概念との関連

Table 4 仮説とその検証

仮説		結果	t値	有意水準	仮説との適合性
1. 全体	SL	.363 (.391) > SLL .218 (.338)	4.78	$p < .01$	○
	男	SL .335 (.413) > SLL .099 (.368)	3.77	$p < .01$	○
	女	SL .377 (.382) > SLL .274 (.309)	3.11	$p < .01$	○
2. 全体	SD	-.081 (.358) < SDD .162 (.317)	6.91	$p < .01$	○
	男	SD -.161 (.335) < SDD .046 (.315)	3.21	$p < .01$	○
	女	SD -.043 (.364) < SDD .216 (.305)	6.19	$p < .01$	○
3. 全体	SL	.363 (.391) < IL 1.15 (2.14)	4.37	$p < .01$	○
	男	SL .335 (.413) < IL 1.59 (3.71)	3.77	$p < .01$	○
	女	SL .377 (.382) < IL .946 (.482)	6.19	$p < .01$	○
4. 全体	SD	-.081 (.358) > ID -.247 (1.65)	1.26	N. S.	
	男	SD -.161 (.335) > ID -.717 (2.79)	1.40	N. S.	
	女	SD -.043 (.364) < ID -.025 (.453)	0.41	N. S.	
5. 全体	SLL	.218 (.338) < ILL .363 (.485)	3.94	$p < .01$	○
	男	SLL .099 (.368) < ILL .193 (.492)	1.25	N. S.	
	女	SLL .274 (.309) < ILL .443 (.463)	4.12	$p < .01$	○
6. 全体	SDD	.162 (.317) < IDD .363 (.485)	4.08	$p < .01$	×
	男	SDD .046 (.315) < IDD .174 (.451)	1.91	$p < .10$	×
	女	SDD .216 (.305) < IDD .350 (.401)	3.74	$p < .01$	×

注) Z変換後の値. ( )内標準偏差  $Z = 1/2 \times \log(1+r)/(1-r)$

れず、理想の自己概念と苦手な他者概念との間に負の相関の傾向があるという結果が得られたことになる。このことから、女子では、好きな他者概念と、その相手の実際の自己概念とに相関があること、及び好きな他者の実際の自己概念と、理想の自己概念との間にも同様な相関があることを考えると、女子は好きな他者の自己の概念を的確に捕らえているという可能性が考えられる。これに対して男子は、苦手な他者概念と理想の自己概念との間に負の相関の傾向があることから、理想の自己に関わる基準をもって苦手な他者を見ている傾向があるという可能性が考えられる。

#### 仮説の検証

次に、仮説との関連から結果を検討する。各被験者の評定間の相関係数をZ変換し、それぞれの平均値の間に有意な差があるかどうかのt検定を行った。仮説との整合性をTable 4に示す。仮説どおりの結果になったのは、仮説1・2・3、仮説と反対の結果となったのは仮説6であった。仮説4については支持する結果は得られなかった。仮説5については、全体および女子では支持されたが、男子については支持されなかった。

仮説1に一致して、好きな他者概念と現実の自己概念との相関は、現実の自己概念と好きな他者の実際の自己概念との相関よりも大きかった。仮説2に一致して、現実の自己概念と苦手な他者の実際の自己概念との相関

は、現実の自己概念と苦手な他者概念との相関よりも小さかった。このことは、被験者が、好きな他者を現実よりも自己に似ていると感じ、苦手な他者を現実よりも自己と似ていないと感じたことを示している。仮説3に一致して、現実の自己概念と好きな他者概念との相関は、理想の自己概念と好きな他者概念との相関よりも小さかった。従って被験者は、好きな他者を現実の自己よりも理想の自己に似ていると感じたことになる。仮説5と一致する結果は女性において見られ、現実の自己概念と好きな他者の実際の自己概念との相関は、理想の自己概念と好きな他者の実際の自己概念との相関よりも小さかった。仮説6とは反対に、理想の自己概念と苦手な他者の実際の自己概念との相関は、現実の自己概念と苦手な他者の実際の自己概念との相関よりも大きかった。従って、好きな他者は現実の自己よりも理想の自己に似ていると見られる傾向があったが、仮説6の反対の結果は、苦手な他者に関しても同様な傾向があることを示している。

仮説4が支持されなかった理由としては、本研究における理想自己が、遠藤(1993)のいう「正の理想自己」であり、苦手な他者の評価基準としては必ずしも適当ではなかった可能性が考えられる。仮説5が男子において支持されなかったのは、男子は理想自己とは実際にはそれほど似ていない相手を苦手な他者として選択してい

ると考えられる。仮説6については全く反対の結果が得られたが、これについては、理想に近すぎる相手は近付きがたいためにかえって苦手と感じられるからとも考えられるが、今後の検討の余地を残していると言えよう。

### 考 察

自己概念と他者概念の類似について、好きな他者については仮説は概ね支持されたが、苦手な他者については部分的にしか支持されなかった。即ち、好きな他者は実際よりも自己に似てイメージされ、また、現実の自己よりも理想の自己に似てイメージされることがわかった一方で、苦手な他者のイメージも現実の自己よりは理想の自己に似ていることが示された。これらの結果は梶田(1967)とはほぼ同様であることから、青年期前期における上記の傾向が、青年期後期にまで持続するといえるだろう。

次に男女別の特徴について検討する。女子は好きな他者を的確にとらえる傾向があり、男子は苦手な他者を理想自己を基準とし、比較してとらえる傾向がある。これは青年期というこの時期の特徴なのか、その後も持続する問題なのか検討すべきであるといえよう。この点の解釈には、いくつかの可能性が考えられる。まず第一に、男子は自己の確立を進めつつ他者との関係性を築いていく(伊藤, 1992)ということから、相手を苦手だと感じるにも、まず判断の基準として自分があり、それに照らしあわせているためと考えられる。第二に、男子は女子に比べると対人関係において好きな他者・苦手な他者の把握の仕方が女子と質的に異なるということが考えられる。

理想の自己概念と好きな他者の実際の自己概念との間に正の相関が見られるのと同様に、理想の自己概念と苦手な他者の実際の自己概念との間にも正の相関がみられるということについては、梶田(1967)でも同様の結果となっていることから、本研究の被験者の特質のみによるものではないと考えられる。一つには、苦手な他者とは、理想から離れているというよりも、理想に近いために近付きがたいところがあるとも考えられる。「自分の所有物、才能や自分の達成したものが関わりを持った人と比較してかなわない」時に生じる感情を羨望という(小川, 1987)。本研究の場合にも、自分自身と比較してより理想に近い他者に対して羨望が起きる可能性がある。羨望は自己評価の低下などを伴う苦しい感情であり、人はこの感情に対し何らかの対処を行うことが知られている(Salovey & Rodin, 1984)。この場合、羨望を感じないようにする一つの方法として、相手と関わらないということが考えられる。そして感情には、自分の行動が正しいか否かについてモニターする機能があると言われる(Pribram, 1971)。従って、苦手という感情が生起す

ることにより、相手に近づくという行動の不適切さに気づき、結果として羨望が生起するのを回避されると考えられる。この点については、自尊感情などと併せて考察・検討する余地があると考えられる。

このことはまた、苦手な他者との関係の複雑さ、苦手な他者概念について評定することの難しさが影響しているとも考えられ、この点については今後さらに検討が必要となるであろう。

以上、本研究では青年期後期の男女を被験者として、対人感情と他者概念との関係を理想自己との関連から検討してきた。その結果、好き・苦手という対人感情により、他者のとらえ方は異なり、また男女による相違があることが示唆された。

今後、その後の他者概念がどう変遷していくか、同性だけでなく異性との関係についても検討されるべきであろう。さらに自己と他者との類似だけでなく、おのおの自己像の構造面との対応についても検討していきたいと考える。

### 引用文献

- 東 清和・小倉千加子, 1982, 『性差の発達心理』大日本図書。
- Berscheid, E. & Walster, E., 1969, Attitude Change. In J. Mills (Ed.) *Experimental Social Psychology*. 123-142. 未見 小川(1987)による。
- Byrne, D. & Nelson, D., 1965, Attraction as a linear function of positive reinforcements. *Journal of Personality and Social Psychology*, 1, 659-663.
- 遠藤由美, 1993, 自他認知における理想自己の効果. *心理学研究*, 64, 271-278.
- Fiedler, F. E., Warrington, W. G., & Blaisdel, F. G., 1952, Unconscious attitudes as correlates of sociometric choice in a social group. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 47, 790-796.
- 福井康之, 1990, 感情の心理学. 川島書店。
- 林 俊文, 1978, 対人認知の基本次元についての一考察. 名古屋大学教育学部紀要(教育心理学) 25, 233-247.
- 伊藤美奈子, 1992, 個人志向性・社会志向性からみた人格形成の一側面. 日本心理学会第56回大会発表論文集, 138.
- 梶田叡一, 1967, 他者についての概念化と対人感情. *心理学研究*, 38, 284-289.
- 小川一夫(編), 1987, 『社会心理学用語辞典』北大路書房。

青木：青年期における対人感情と他者概念との関連

Pribram, K. H., 1971, *Languages of the Brain: Experimental paradoxes & principles in neuropsychology*. Prentice-Hall (岩原信九郎・酒井誠 (訳), 1978 脳の言語. 誠信書房)

Salovey, P. & Rodin, J., 1984, Some antecedents and consequences of social-comparison

jealousy. *Journal of Personality and Social Psychology*, 47, 780-792.

Winch, R. F., 1958, Mate-selection; A study of complementary needs. Harper Press.

(1993年3月10日受稿, 1994年11月28日掲載決定)